

コロナ禍の青少年のこころ

「いのちの旅は終わらない」の実践から

宮城県立仙台第二高校

■背景・考察

親になるための教育推進事業の一環で、家庭科「保育」の授業として実施。1学年4クラス161名。
この学年は、小学校入学時に東日本大震災を経験しており、今回のコロナも含め人生の大事な節目を翻弄される不条理を、保護者共に感じていると推察される。
生徒は、真面目に授業に取り組んでいるが、高校一年生のウキウキした弾けた雰囲気は見られず、まだどこかよそよそしい感じすら見受けた。コロナ禍のコミュニケーション不足や制約された高校生活への不安が危惧される

コロナ禍の青少年のこころ

「いのちの旅は終わらない」の実践から

宮城県立仙台第二高校

■ アンケート（子育てや親への思い）

私たちは生まれる前から祝福されていたのだと思った。
親には子を受け入れ、子と向き合う覚悟が必要だ。
親も手探りで自分の人生を歩んでいることがわかり、親
ともっと分かりあいたいと思った。
親になることは「あたりまえ」にできることではなく、
様々な困難を越えながら少しずつ前に進むことそのもの
が「子育て」なのだと思った。
自分の成長を親と共に喜べるように邁進したい。
親や支えてくれてきた方々に感謝する。

コロナ禍の青少年のこころ

「いのちの旅は終わらない」の実践から

宮城県立仙台第二高校

■ アンケート（命のバトンタッチや生き方）

自分らしさや存在価値について考えさせられた。
命のバトンタッチは、自分の思いや考え方を次の世代に伝えていくことでもあるということを知り、今の自分にもできることがあるのだと感じた。
後世に自分の生きた証や“思い”を伝えると考え、時々何のために自分がいるのか自信を失うことがあるので、このことを覚えておきたい。
親子という形でなくても“命のバトンタッチ”ができると思い「生きる」ということに勇気がわきました。